

2018年度 日本語教育実習 最終レポート

三年間での変容

変容について「留学での出来事」「帰国してからの取り組み」「教壇実習にかけた思い」の三つに分けてまとめていきます。

留学での出来事 (2017.9月～2018.3月)

三年間で私に最も大きな変化を起こした出来事は、「イギリス留学」です。イギリスに行って感じたことは、「海外からの日本の評価の高さ」でした。私が日本人であることを知った海外の友人は、日本の文化や日本語について、興味をもってたくさんのことを聞いてきました。その際、私は度々自分の日本についての知識の低さを身に染みて感じました。「なぜ日本人はお辞儀をたくさんするの。同じアジア圏の中国人や韓国人はあんまりしないよ。」「なぜ日本人女性はいつも化粧しているの。キャンパスライフにメイクはそんなに必要ないんじゃない。」「日本人はなぜ『先輩』『後輩』の区別をそこまで厳格にしているの。」等、数えきれないほどの質問を受けました。日本に長年住んでいる私にとっては、何一つ特別なことではない、当たり前のことを質問されました。しかし、私は全く答えることができませんでした。自らの答えに自信がない私は、質問のたびに、ケータイを開いていました。インターネットの情報に頼って答えている自分が嫌になりました。これが、「日本のことをもっと勉強しよう」と心に決めたきっかけです。日本のことをこんなにも知ろうとしている外国人がいるのに、私は何も知らないということに羞恥を感じました。「海外からの日本の評価の高さ」は当時の自分に、日本語教育という面で大きな刺激を与えてくれました。

また、「日本語を教えることへのやりがい、憧れ」の再確認もできました。恵まれたことに私の周りには、西南女学院に一度留学経験のある友人が沢山いました。イギリスに到着し、入国審査のゲートを出ると、一人の友人が「ウェルカム、oooo」と、私の名前を日本語で書いたボードをもって空港で待っていていました。本当に嬉しかったです。日本から遠く離れている国で、自分の名前を母国の言葉で書かれているのを見て勇気づけられました。留学を終えても、日本が好きで、日本語を書けることを誇りに思っている彼女の姿をみて、とても誇らしく思いました。彼女たちと一緒にいる際、「日本語をもっと勉強したいな。」「イギリスにもっと日本語を教えてくれる先生が居たらいいのな。」ということも、多々聞いていました。週末に、日本語勉強会を開いたこともあります。日本にいるホストファミリーへ手紙を書く手伝いもしていました。海外での「日本語教員の必要性、必要性」を感じました。「日本語を母語とするから、日本語を教えることができる」と一般的に海外の人は思いがちですが、「教える」と「母語として話せる、使える」はかけ離れていること

を再認識できました。

上記で述べた「海外からの日本の評価の高さを認識した」「日本語を教えることにやりがいや憧れを感じた」とともに、当時の私のレベルでは、プロの日本語教員の方々の前で、「日本語教員目指しています。」とは言えないなど、自分の未熟さを痛感しました。

帰国してからの取り組み (2018. 3月～2018. 7月)

帰国前から、私は日本語教育実習が怖い反面、楽しみで仕方ありませんでした。「自分の知らない新しいことをたくさん知れて、壁にたくさんぶつかりながら、実習に臨んでいくのだろうなあ」と思っていました。「早く自分の日本や日本語についての知識を補いたい」という気持ちでいっぱいでした。

帰国して次の日、本屋へ駆け込み、日本文化についての本や日本語学の本を数冊買い、読み込みました。完全に「日本語教員」を意識していました。少しでも多くの日本のことを2018年度ウィンチェスターからの留学生に知ってもらおうと努めました。実習とは関係なく、留学生のお世話係もしていたので、「もっと満足させるような授業をしたい」「もっとたくさんのお話を教えてあげたい」という感情が増していました。「恥ずかしいところを見せたくない」というプライドもあったと思います。彼女たちと一緒にいる間、日本語のみならず、日本の文化を通じて日本の魅力を伝えようとしていました。春には、花見やゴールデンウィーク（日本の祝日）について、夏は、祭りや四季折々の食べ物について伝えました。それらの経験を通して、「人に何かを教えることの楽しさ」を学びました。

前期の実習授業では、日本の生活ですぐ実践して使える日本語を、教科書の内容に関連付けながら取り入れることに挑戦しました。「飛び交ってくる質問に向き合うこと」を個人的な目標にしていました。授業で、教えている内容が学習者に伝わっていないとき、彼女たちの表情は変わります。興味を引くことを続けていないと、学習者の授業参加の意欲が薄れてきます。そこから、教師の一方通行型の授業になってしまいます。三年前期の実習では、教師目線で、学習者の表情を見るという経験が初めてだったので、頭に？マークが浮かんだ学習者を目の前にして戸惑いました。そのような状態を作らないように、授業の準備を大切にしました。学習者が興味を持ちそうな内容の下調べは、自分の知らないこともたくさんあり、私自身にとっても、いい経験になりました。

このように帰国してから、「教えようとする意欲」が飛躍的に伸びました。「教えようとする意欲」によって、私は、自分の知らないことをそのままにするのではなく、とことん調べる習慣ができました。

教壇実習にかけた思い

「学習者の印象に残る授業」を作りたいと思って臨みました。それに加えて、三年間勉

強してきたことを無駄にはしたくないという気持ちもかなり大きかったと思います。私が十分な授業準備をし、思いっきり授業に臨まないで、学習者の為にならないということを常に考えていました。なかでも、「時間管理の徹底」「教案の作り」「学習者参加型授業」をポイントにして実習に取り組みました。

「教案づくり」は、正直初めてで、一番心配しているところでもありました。教案の作り方の本を参考にしながら、Wordに原稿を打ち込みました。自分の頭の中で、何度も授業のリハーサルをし、スムーズにいくか、時間は余らないか等、作戦を何度も練りました。この中で、学習者が質問してきそうなことを予想したり、話題を広げることが可能な部分をピックアップしたりしました。

「時間管理の徹底」は、最後まで完璧には出来ませんでした。自分が予想していた時間よりも、学習者がスムーズに問題をこなしていってしまうこともありました。予習しているはずの部分をやっていないという場合も稀にありました。教壇に立っているからには、いただいている40分もしくは50分の時間を責任をもって活用しなければなりません。時間を上手く活用するための、私の策としては、

1. タイマーを常に見える位置に置くこと。
2. 時間が余る場合は、常に対話型授業に心がけること。
3. 時間が余る場合は、グループワークを取り入れ、学習者の発話を増やすこと。
4. 時間が足りない場合は、プリント等の個人で学習できる部分を省くこと。

の四つを絶対行うようにしていました。そうすることで、急に焦ることなく、授業することが出来ました。

「学習者参加型授業」というのは、自分だけ満足のいく授業は絶対にしたくないという思いから生まれたポイントです。三年間、横溝先生から数多くの日本語教員による授業のビデオを見せていただきました。「この人の授業、おもしろいな。学習者が楽しそうにしているな。」と感じた授業は、すべて、学習者の発話数の多いメリハリのある授業でした。自分が教壇にいざ立つと、なかなかメリハリをつけながら、発話を広げることは難しく、悩みました。発話と授業を上手くつなげるということは、授業を楽しくするためのスキルでもあります。経験数が必要だと強く思いました。

● まとめ——変容をもとに、これからの抱負

私にとって、「日本語教員」という仕事は、文字通り「日本語を教える先生」というイメージで一年時、履修を決めました。グローバルな場所で働けるかっこいい仕事をしたいという希望があったため、日本語の先生に挑戦してみようと思いました。1,2年時は、「日本語教員」を目指しているという気持ちはありましたが、ただ授業をこなして、レポートに

取り組むという受け身な態度だったと思います。留学での出来事で、「日本語教員」に対する熱意が変わり、必死で課題に取り組むようになりました。

三年間を通して「日本語教員」のやりがい、必要性、価値を考え直すことが出来ました。ただの「カッコいい」というイメージでしたが、そんな先生になるためには、下準備や学習者からの信用、やる気、様々なことが必要でした。「日本語教員になりたい」という目標は、変わっていませんが、今期の実習や三年間の日本語教員養成課程の授業で学んだことを、教員とは違った立場で活かしていきたいと考えています。

「学習者の前に立つ私は、彼らから見て『先生』以外の何物でもないというプレッシャーが自分を強くした」と感じています。プレッシャーに負けない強さを胸に、日本の魅力を海外に発信し続ける人間になれるよう、卒業後は、日本のメーカー企業で働きたいと思っています。そして、将来、もう一度「日本語教員」として、教壇に立てるよう、たくさんの方の事を長い人生で勉強していきたいです。